

## 粟国島の考古学調査

知念 勇\*

### はじめに

粟国島における考古学調査は、1957年1月新田重清氏（当時糸満高校教諭）による。数日間の表面調査があり（注1）巣飼貝塚、西御願貝塚の2遺跡と、照喜名原砂丘（俗称ウーグの浜）に遺物散布地が確認された。

同氏は1961年8月、再び粟国島を訪ずれ、巣飼原貝塚の発掘調査を実施し、当館々報No.5に報告がなされた。（注2）。

その後1968年3月沖縄大学々生文化協会による粟国島総合調査が行なわれ、5名の考古班員による9日間の表面調査が実施された。この調査では、粟国島に洞穴が多いのに目をつけ、洞穴内調査が重点的なされた結果、松尾原洞穴遺跡と草戸原洞穴遺跡の2つの洞穴遺跡が新たに発見された他浜部落の北東部と東部落の東方に遺物散地が確認された。

今回当館の粟国島総合調査は、3泊4日の日程で実施された。正味3日間の調査期間のうち1日間は雨で調査ができず、実質的な調査は2日間であった。

短期間の調査のため、前述したようなすでに発見された遺跡の調査ということよりも新しい遺跡の発見に重点をおいた。

現在知られている粟国島の遺跡中最も古い西御願と巣飼原貝塚は、前期IV期（注3）の後半までしかさかのぼれず、粟国島における人類の始原としては、周辺の島とのかかわりでみても新しいと考えられる。したがって、今回は特に古い遺跡の発見ということで期待をもって、調査を行なったが、このことに関しては不発に終った。

特に最近報告（注4）された渡嘉敷船越原遺跡発見のヤブチ式、渡具知東原式（報文中では、東原式をヤブチ式に含められているが、第1図と図版でみるとかぎりにおいては、東原式に属する土器と考える）、条痕文土器（報文中第2図1・2

の土器で、曾畠式として報告されているが、読谷村渡具知東原遺跡では、曾畠式土器に伴って出土する土器ではあるが、型式的には別の土器と考えられるため、条痕文土器としたものである。）、赤連系（室川下層式）、爪形文土器等である。最後の爪形文土器をのぞけば、これら土器は渡具知東原遺跡（注5）から出土した土器である。編年上も前期I～II期に含められ、沖縄では最も古い縄文時代早前期の土器群である。

最近考古学的には、最も注目を集めているこれらの土器群が粟国島とは至近距離にある渡嘉敷において、発見されているということで粟国島調査への期待は大きかったのである。

今回、浜部落北側入口の浜崎原に新しい遺跡を発見したが本遺跡は、前述した期待とは逆に粟国島では最も新しいグスク時代以後の遺跡であった。またこの浜崎原附近からは前期V期に属する。宇佐浜期の土器片と第2図2にみられる石斧片が採集された。

今回特に重点的に調査を行なった地域は、照喜名原砂丘と巣飼原貝塚の立地する琉球石灰岩の丘陵上とその崖下、東、西、浜の三つの集落内とその周辺である。

この三地域にかぎっては念入に表面調査を行なったが、前述したように期待した程の成果は得られなかった、しかも島の総面積の約 $\frac{2}{3}$ を占める。北側の原野と畑地からなる地域等未調査の地域を多く残している。

したがって、今回は、きわめて不充分のまま調査を打切らざるを得なかった。

以下各遺跡の表採品を中心に述べることにする。

### ① 巢飼原貝塚

西部落の北西に添つて、東北と南西に伸びる断層がある。本貝塚はその断層の中間部、西部落

の北端に添う琉球石灰岩台地上に立地する。断崖下には西御願があり、西御願貝塚もこの断崖下に立地する。

沖大文協の報告(注3)によれば、巣飼原貝塚は1965年の道路工事によって、貝塚は破壊され、包含層はわずかに残存するとなっている。しかし今回の調査の結果、上倉原・巣飼原にまたがる台地上とその崖下約500mにまたがって、遺物の散布がみられた(第1図参照)ことから巣飼原貝塚の範囲はきわめて、広範囲にまたがることが確認された。  
しかしながら崖上、崖下とも遺物の散布量は少ない。遺跡の立地や規模などから考えると、与那城村宮城島シヌグ堂遺跡に共通点が多い。

段丘上は雑木等が繁茂し、立入が苦難ということもあるって、遺物の大半は崖下から採集されたものである。

第1図1~3は、口縁部の肥厚部が断面三角形を呈する宇佐浜式の土器である。同1は、無文の壺形で胎土には石英細片を多量に混入する、焼成のよい硬質の土器である。

同2は小破片のため器形は不明である。口縁部から肩部にかけて、2本の沈線文が施されている。胎土には、石英細片を多量に含む焼成のよい褐色を呈した硬質の土器である。

同3図は、口縁部直下に縦位に3本のミミズバレ状のはり付文が約1cm間隔で施されている。このはり付文の両わきには刺突文が数点施されている。ミミズバレ状のはりつけ文間には、斜行する沈線文が施され、その左右を数本の長沈線文で埋めるもので、奄美系の文様構成である。(注7)胎土には多量の石英粒と長石、角閃石と黒雲母を含むため、手ざわりがザラつく感じの褐色の土器である。宇佐浜期の特徴を有する土器である。

同4は、口縁部が肥厚しない深鉢形の土器で、口縁部が外反する。同1~3に比して、表面調整が良く、胎土には石灰岩細片が多量に含まれるなどの特徴を有する。器色も黄褐色である。

同5は、胴部の有文破片で現存部の中央に4本の押引文が施され、その左右には斜行する沈線文を2条施している。胎土には、同4と同様

石灰岩細片が含まれるが、器色は明るい褐色の土器で焼成も良好である。

同6は、平底の土器で底部から胴部への立あがりがゆるやかである。胎土には石英、長石が混入する褐色の土器である。器形、胎土等の特徴からして、宇佐浜期の底部とみてさしつかえない。

同8は、本遺跡採集の遺物では最も古い土器である。幅のせまい単刃工具による横位の押引文が現存部でみると6本施されている。

口縁部は軽微な山形をなし、山形の頂部から2cm左に段をなす。段状となった部分に一条の押引文が施される。胎土には小量の石英が混入するが前述の宇佐浜期の土器にくらべれば混入量が少なく、肉眼では気付かない程度混入物が小さく、少くない。また長石、角閃石の含まれないのも、前述の土器群とは異なるところである。

深鉢形の器形であるとみられる。文様、器形等から荻堂式の土器である。現在のところ粟国島では最も古い土器である。

粟国島の土器については、多和田真淳氏(注8)は「粟国村東の俗称ガイーにある遺跡で、面積は40坪位で断崖下にあり発掘有望な遺跡でカヤウチバンタ式、宇佐浜式に似た鉢形、壺形土器が出土し、多く無文であるが有文の場合は口縁部に刺突文、爪形文等が施され、包含層は80cm位なる由。」と記されている。

新田氏報文(注9)の結語を要約すると、(一)單一層であること、(二)宇宿上層式の土器が主体となること、(三)多和田編年の後期上半期に位置づけられること、(四)カーボン測定資料( $760 \pm 80$  BC)となっていること(注9)、(五)西御願貝塚→巣飼原貝塚→浜の遺物散布地(後期砂丘遺跡)の編年がなされ、(六)マイマイ類等の混貝土層を形成すること。(七)本遺跡から片刃石斧や撓形石斧及び外耳土器が検出されたこと、更に後期砂丘系浜遺物散布地から八重山下田原式のヘラ状石斧が採集されたことは、その内容において、農耕的様相を相定されるものであるとしている。

また、沖縄大学の調査によって採集された土器についてでは、その主なものを一部を第4図にかかげた。

## (2) 西御願貝塚

本貝塚は、新田氏によって発見された貝塚であるが、沖大報文によると、本貝塚は字西の俗称イキントガ（溜池）の上方約5米の上方崖下に形成されている。断崖下には岩盤の亀裂や小洞穴があり、東方約5米の位置に拝所の西御願がある。包含層は確認できなかった」とあり、新田氏の示している貝塚の位置とは200mばかりのズレがある。また先述した多和田氏の場合も、巣飼原貝塚と西御願貝塚の両者を混同している。

今回調査を行なったところ、西御願上部の崖の直下には約500mにわたって遺物の散布がみられた。しかもこれらの遺物は、石灰岩の割目等を伝わって、台地上から土と流れ込んできたとみられる状況にあった。崖下にはオリジナルな遺物包含層は確認されなかった。

これらのことから判断すると、面御願貝塚は、巣飼原貝塚からの流出、落込みによる遺物の出土状況であり、巣飼原貝塚と同一の遺跡と考えられる。

このことは、沖大採集の遺物第4図と第5図の比較によてもわかる。

## (3) 松尾原洞穴遺跡

沖縄大学々生文化協会によって発見された遺跡で、西部落の西方約400mの地点、俗称ハバサクガマ内にある洞穴内の遺跡である。洞穴の前面は畠地である。遺物は畠地内からも採集され

洞穴は北西に向って開口し、入口附近に20~40cmの遺物包含層がみられるが層の断面からみると、遺物の量はきわめて少くない。洞穴内は入口をのぞくと浸蝕を受けており、入口とは1.5~2mの断層をなす。洞穴内については、雨が降ると水の通り道となっており、現況から考えると住居としては不適当である。

第1図7はくびれ平底の土器で、胎土には石英の細片等混入物はなく、巣飼原の土器とは様相を異にする。焼成のよい硬質の土器である。後期終末の土器とみられる。

その他無文胴部の細片は数個発見されているが胎土、器形からみて、後期終末のグスク時代への移行期の土器とみられる。

同図9は須恵器の胴部破片である。表には、横位の波状文が2条とその間に沈線文が一条施されている。裏面には形成時の格子状のタタキ痕がみられ、表裏面にクロ形式時の条痕文が残っている。

佐藤伸二氏の須恵器分類(注11)に従えば第B類に属する。またこの種の須恵器は、久米島ヤジヤーガマ遺跡からも発掘され、復元されている。このほか石皿、磨石が採集された。

## (4) その他の出土遺物

八重川(エガー)グスクには、図版1にみるような石積がみられるため、グスク時代の遺物が採集できるのではないかと、周辺をくまなくまわつたが、土器や中国陶磁等のいわゆるグスク系の遺物は1片も採集できなかった。

このグスク附近から採集した遺物は、第3図1の石斧片が1個だけであった。

石質は、角閃岩製で刃部と頭頂部が欠損する。はまぐり刃の石斧であったことが推定できる。その他この附近には石皿も発見されており、これらは、グスク時代の遺物というよりは、巣飼原貝塚に関連する遺物と考えてよいと思う。

第2図1は、照喜名原砂丘から採集されたシコ貝製のおもりである。表裏面ともかなり摩耗している。

第2図2は、浜崎原の慰靈塔附近から採集された石斧片である。頭部側の約半分は欠失し、刃部は円味くなり、刃の役割を失なっている。側面角ばった形に研磨が施されるなど、をみると宇佐浜期の石斧であったことが考えられるが現状でみると、敲石等に転用されたものとみられる。第3図1の石斧同様角閃岩であり、当館大城逸朗学芸員によれば、粟国島では産しない石で、沖縄県内で類似の岩質は慶良間諸島に分布しているが、同一地のものかは不明であるとの見解を得た。

浜崎原には今回新しい遺跡が発見された。グスク期よりも少し新しい時期の焼成のよい硬質の土器が数片採集された。

これらの土器はすべて細片のため、器形は不明である。

この他字西 226 番地新城宗一氏宅前の路上において青磁を 2~3 片採集した。

### まとめ

以上、今回採集の遺物を中心にのべたが不充

分な調査に終った。今一度調査の機会をもってまとめたいと考えていたが、年度末はいそがしく、その機を失い、不本意な報告書となった。

これまで発見された各遺跡の編年表をかけまとめとしたい。

遺跡名 \ 時期	前期IV	前期V	後期III	グスク
巣飼原貝塚	—	—	—	—
松尾原洞遺跡	—	—	—	—
草戸原洞遺跡	—	—	—	—
東原散布地	—	—	—	—
浜散布地	—	—	—	—
浜崎原遺跡	—	—	—	—

粟国島遺跡年表（編年基準は高宮編年に従った）（注4）

### 文 献

- (1)新田重清「慶良間諸島の遺跡分布について」  
文化財要覧、琉球政府文化財保護委員会1961  
年。  
(2)新田重清「粟国島巣飼原貝塚調査概報」、琉  
球政府立博物館々報、1972年No.5。  
(3)粟国島・久米島具志川村調査報告（郷土第  
7号、沖縄大学学生文化協会1968年11月）  
(4)高宮廣衛「沖縄諸島における新石器時代の  
編年（試案）南島考古第6号によった。  
(5)宮城朝光「渡嘉敷原船越遺跡の土器」花綵創

刊号、沖縄国際大学考古学研究室1979年。

(6)「渡具知東原遺跡」読谷村教育委員会、  
1978年。

(7)河口貞徳「鹿児島考古」第9号、1978年

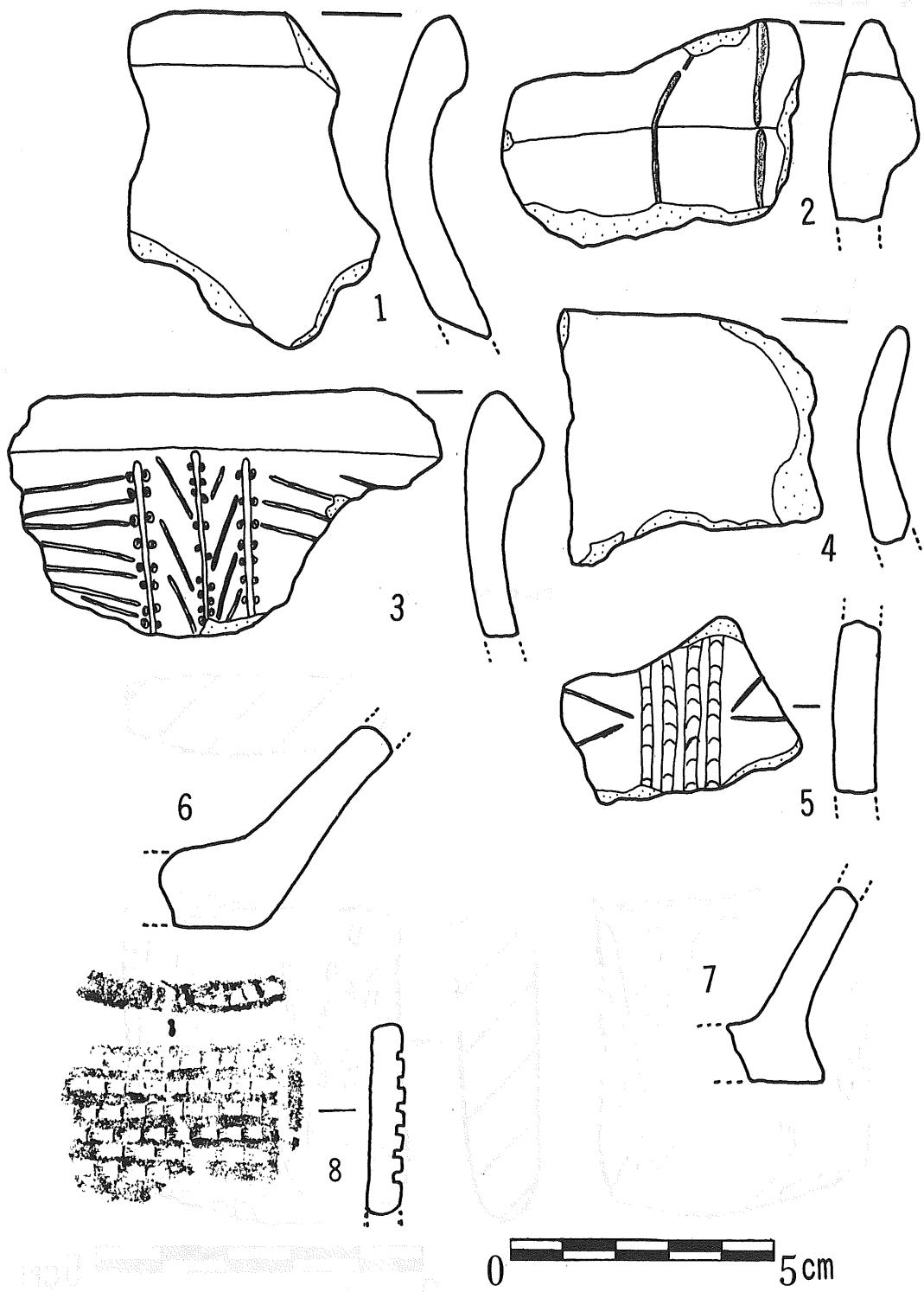
(8)多和田真淳氏「琉球列島の貝塚分布と編年  
の概念」文化財要覧、1960年。

(9)は(2)に同じ。

(10)リチャードピアソン「最近の沖縄諸島にお  
けるラジオカーボン測定」1969年。

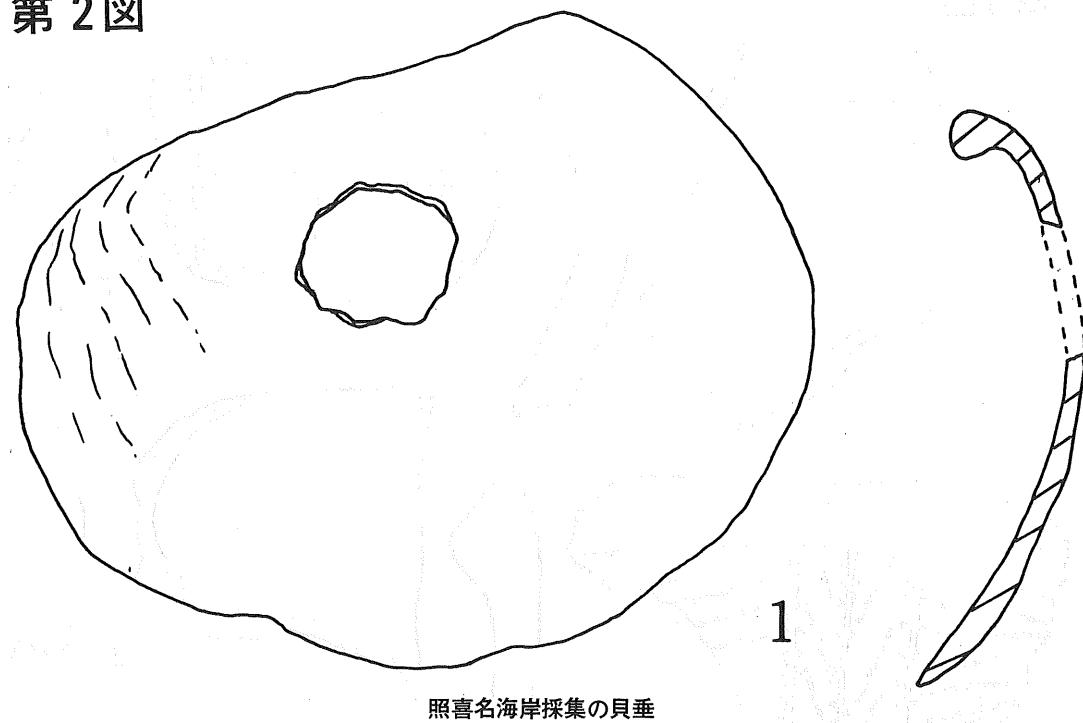
(11)佐藤伸二「南島の須恵器」沖縄の社会と習  
俗、1970年

第1図

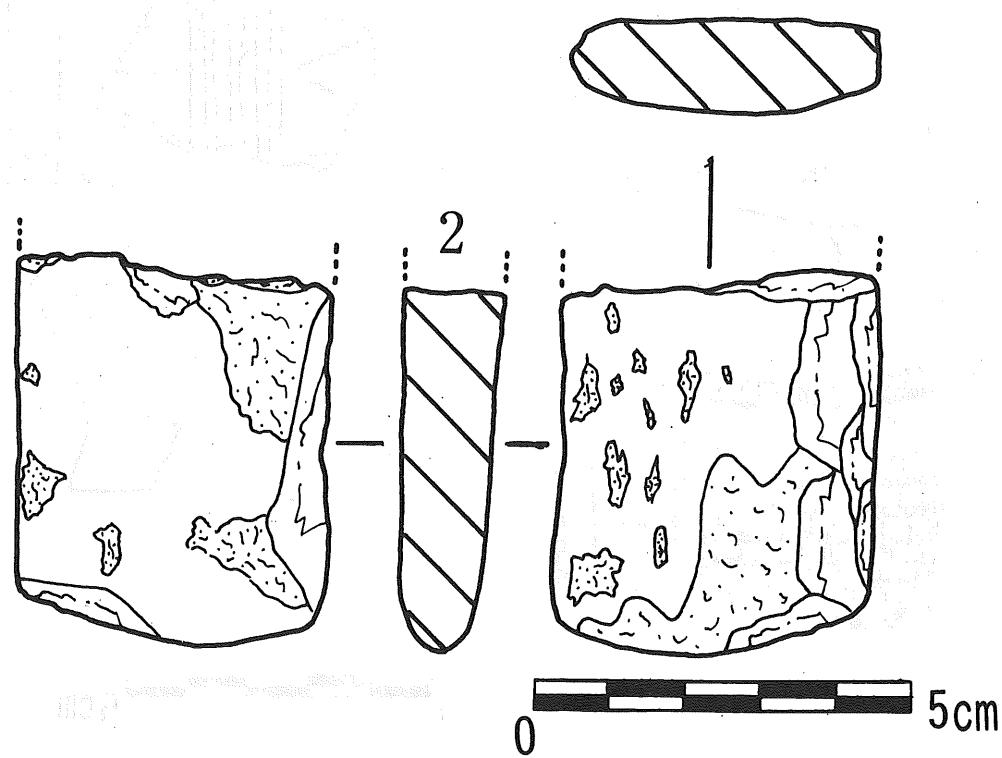


巣飼原貝塚採集の土器

## 第2図



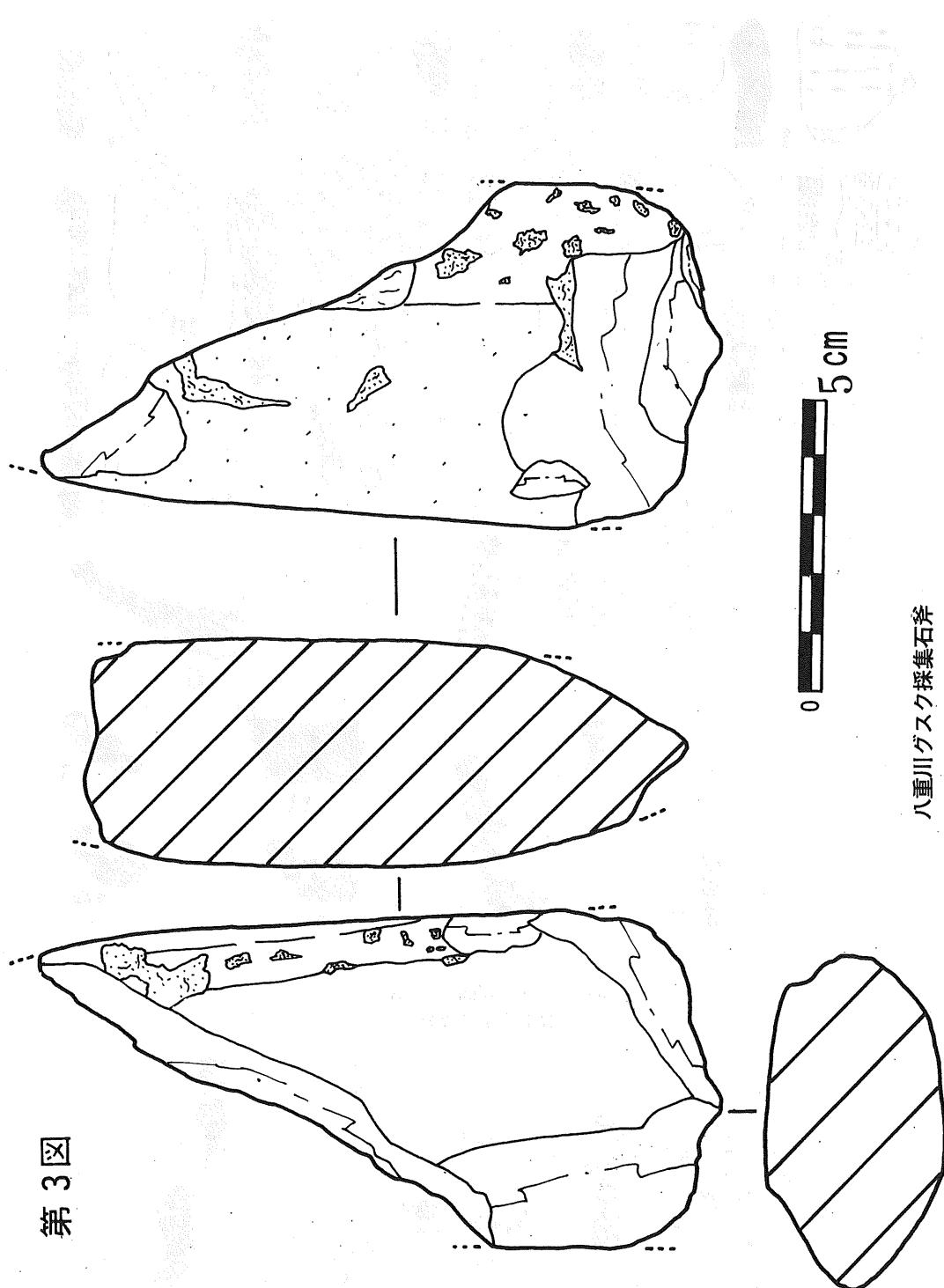
照喜名海岸採集の貝垂



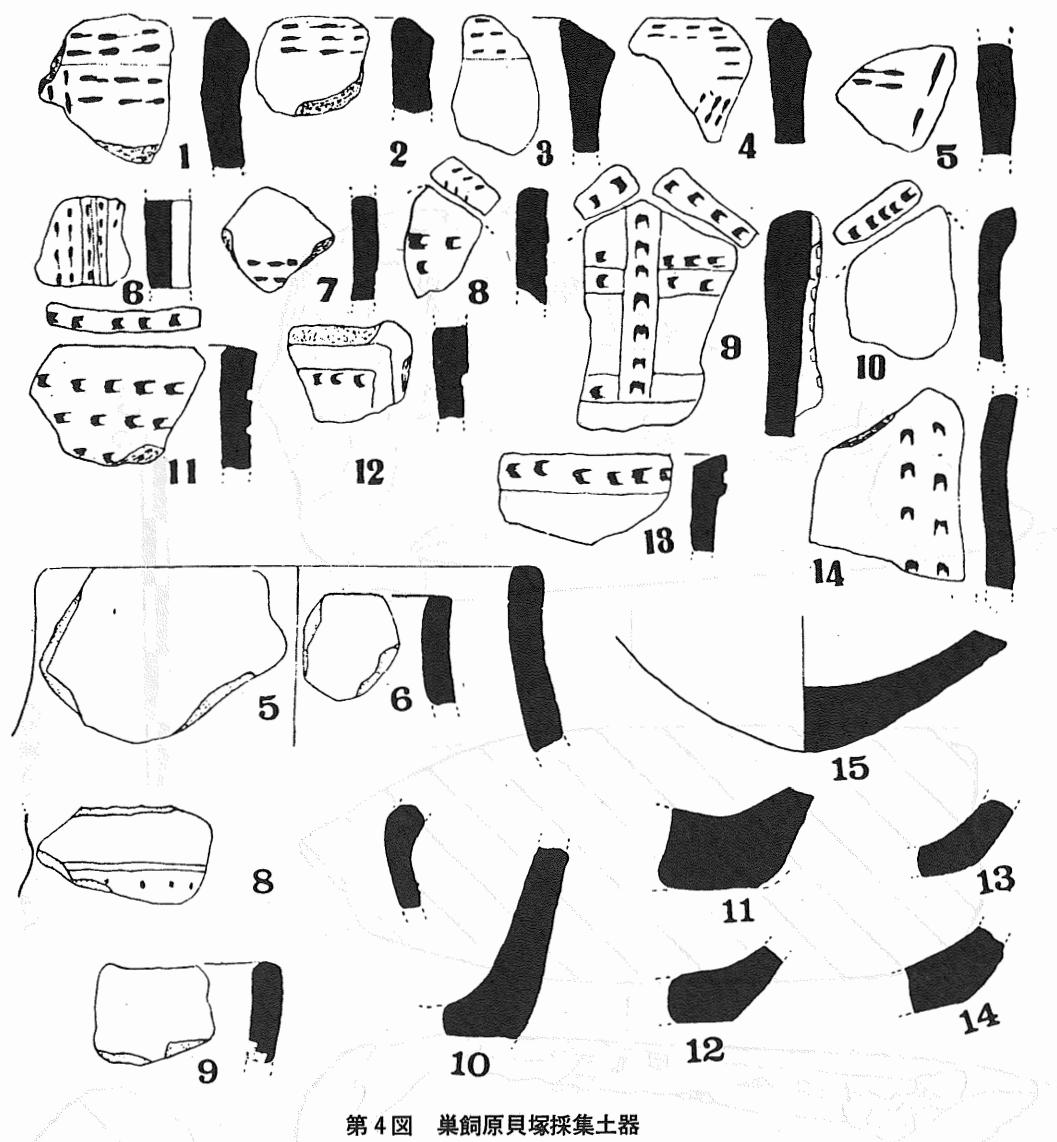
浜崎原附近採集

八重川グスク採集石斧

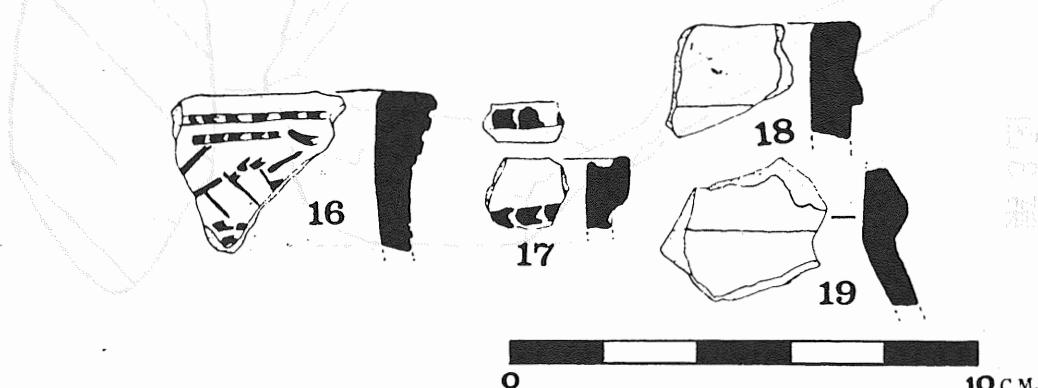
5 cm  
0



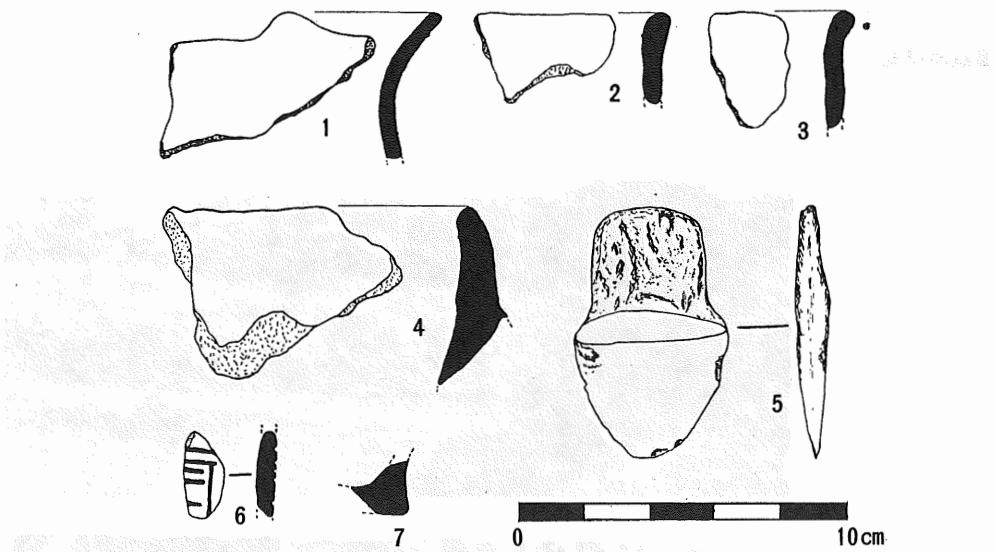
第3図



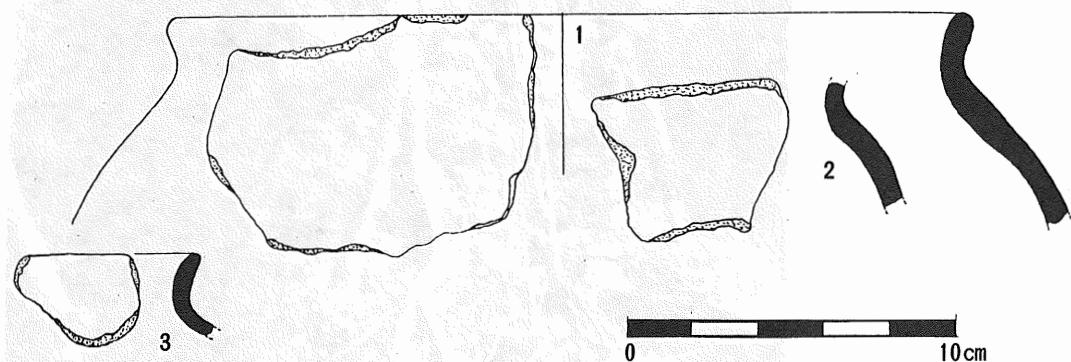
第4図 巣飼原貝塚採集土器  
郷土第7号より



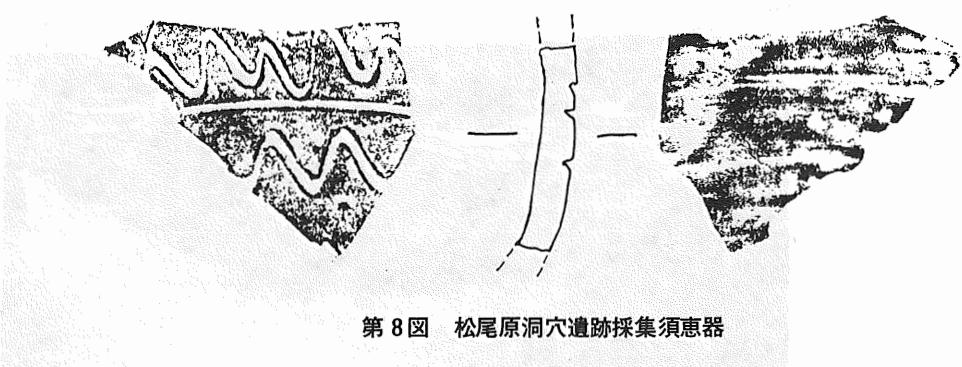
第5図 西御願貝塚採集土器  
郷土第7号より



第6図 字東、浜遺物散布地  
郷土第7号より



第7図 草戸原洞穴遺跡  
郷土第7号より



第8図 松尾原洞穴遺跡探集須恵器

1 巣飼原貝塚



2 八重グスク石積



3 浜崎原遺跡遠景



栗国村遺跡分布図

